



末松 謙澄  
(1855 ~ 1920)

明治8年(1875)12月、謙澄は東京日日新聞の編集長となり、名作家記者といわれていたが、22歳のとき新聞社を辞め、官吏の道へと進んだ。それは近代国家の建設のために役に立ちたいという思いからだった。政府に留学の願いを提出して、明治11年1月、念願がかなって英国への留学が決まった。当時の参議伊藤博文などのあと押しもあったという。当初の英国公使館付一等書記官見習の辞令に、英仏歴史編纂方法の調査の役目も付け加えられた。

## 「念願の英国留学と 英訳『源氏物語』の刊行」

出発の船中で偶然、近代麻糸工業研究のために留学している水哉園時代の親友吉田健作と一緒にになった。それまで2人は互いに仕事で忙しかったために連絡がとれなかったらしい。後年、二人の留学中のことは、数奇な運命で出版された『異郷の友垣』に書かれている。

当時の船旅は過酷なものであったが、謙澄と健作は無事、ヨーロッパに到着し、謙澄は英国行の途上、パリで開催されていた万国博覧会を見学し、四月末日にようやく英国公使館に到着。在英中、公務のほかには帝室制度、英仏歴史編纂方法などの調査、情報交換につとめ、日本人会などで研鑽をつんだ。また、英国女王に謁見したり、日本軍艦がはじめて英国に寄港した時、艦長を芝居見学案内したりして、積極的に活動。下宿を探すのにも家族の多い家を選び、できるだけ英国人の生活を知ろうとした。

当時、世界の人たちの多くは日本が非文明国と思っていた。そこで、真の日本を知ってもらうため、日本人初の英訳『源氏物語』を明治12年に刊行した。この書は今日でも高く評価されている。ついで『成吉思汗(ジンギスカン)』、『支那古学略史』なども刊

行。謙澄は常に「国家」の発展を意識していた。

明治12年12月、外務3等書記生となるが、大学受験勉強に専念するため、一時、公使館勤務をやめる。同14年10月、ケンブリッジに移り、大学に入るための予備試験である難関のラテン語、ギリシャ語、幾何学、代数などを猛勉強した。そのかいがあって無事に合格。同17年12月、ケンブリッジ大学を卒業し、法学士の学位を得た。同19年3月、文部省参事官として7年余の留学を終えて帰国。謙澄の前途は大きく開けていった。

(文化人末松謙澄を考える会

城戸 淳一)

▶『異郷の友垣』(吉田健作遺稿、末松謙澄補綴、発行) 謙澄は在英時代に健作から完成原稿を預かっていたが、それを下宿の使用人が誤って焼いてしまう。

健作が亡くなった後、謙澄は書き残されたメモを集めて、整理し、解説というかたちで補い、一編の小説に仕立て、他の作品と共に遺稿集として自費で刊行。

2人の美しい友情のあらわれである。

